小学校　図画工作科　部会

部会長　中元寺小学校　校長　中川　雅彦
実践者　中津原小学校　教諭　古野　　操

１　研究主題　　確かな学力向上をめざす　図画工作科学習指導のあり方
～感性を働かせ、つくりだす喜びを味わう活動を通して～

２　主題設定の理由

（１）現代社会の要請から

現在社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイディアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になっている。

変化の激しい社会を担う子どもたちには、基礎・基本を確実に身につけ、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性が必要になってくる。そのため、豊かな感性を働かせながら、自分の思いや願いを様々な形で表現したり、周りの人たちの表現の違いに気づいたり、それを認めたりする能力を育てることが大切である。

以上のようなことから、図画工作の実践は、児童の「生きる力」を育むうえで重要な働きをしていると考えられる。

（２）図画工作科の目標から

図画工作科のねらいは、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら 、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことである。

「つくりだす喜びを味わう」とは、感性を働かせながら作品などをつくったり見たりすることそのものが喜びであり楽しいと感じることである。それは、児童の欲求を満たすとともに、自分の存在を感じつつ、新しいものや未知の世界に向かう楽しさにつながる。また、友人や身近な社会とのかかわりによって一層満足できるものになる。このようにして得られた喜びや楽しさは、形や色などに対する好奇心、材料や用具に対する関心やつくりだす活動に向かう意欲などの造形への関心や意欲、態度を支えるものとなる。

児童自身に本来備わっている資質や能力を一層伸ばし、児童が自らつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、生活や社会と主体的にかかわる態度を育て、豊かな情操を養う活動を取り組むことは意義深い。

（３）児童の実態から

本学級の児童は明るく素直で、活動的である。図画工作科に対しても「絵を描くのが好き」「いろいろな物を作るのが楽しい」など、意欲的に学習に取り組む児童が多い。しかし、中には「何を描いたらいいかわからない」「自分は絵や工作が下手だから…」など自分を表現することに苦手意識を感じており、学習に対して消極的な児童もいる。そのため、子どもたちの資質や能力が十分働くように、様々な体験や様々な表現の方法を取り入れた

学習を仕組んでいくことが大切であると考える。また、全ての子どもたちが自分の作品に自信を持って取り組めるような活動のあり方を工夫していく必要がある。

３　主題の意味

（１）図画工作科における「確かな学力」とは

図画工作における「確かな学力」とは、基礎・基本としての資質や能力を支え、その基盤となる知識や技能、見方・感じ方と考えられる。ただ作り方や描き方を機械的にたどっていけば身につくものではない。子どもが自分で具体的なものに目を向け、そこから自分の思いを材料に託して表現するなかで、子ども自らが気づき、身につけていくものである。つまり、子どもの表現や鑑賞の活動と常に一体となって働く力であると考える。そのためには、ある題材の中で育てたい資質や能力を可能な限り具体的な子どもの姿で設定することが大切であると考える。さらに、その資質や能力を支える知識や技能や感じ方を発達段階や実態をもとに考え、教師が教え込むものではなく、子ども自身が気づき身につけていくことができるように、学習過程や支援のあり方を工夫していくことが大切である。このような学習指導を行っていくことで、図画工作における「確かな学力」が向上していくと考える。

また、図画工作科では「つくりだす喜び」は知識・技術を習得し、活用していこうとする意欲でもあり、つくりあげたあとの達成感と次の活動への意欲でもある。図画工作科の学習は、自らの感性を働かせながら、造形的な創造活動の基礎的な能力を発揮して表現や鑑賞の活動を行い、つくりだす喜びを味わうものである。このような過程は、その本来の性質に従い、おのずと良さや美しさをめざすこととなる。それは生活や社会に主体的にかかわる態度を育てるとともに、伝統を継承し、文化や芸術を創造しようとする豊かな心を育てることにもつながる。

４　研究の目標

図画工作科における「確かな学力向上」をめざすために、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう学習活動のあり方を究明する。

５　研究仮説

図画工作科の学習指導において、次のような手だてをとれば児童は感性を働かせながら意欲的に活動し、確かな学力向上へとつなげることができるであろう。

①　児童が「やってみたい、作ってみたい」という表現意欲を喚起することができるように題材との出会わせ方を工夫する。

②　児童に表現意欲を持続させるために、様々な技法を体験できる場と時間の確保をする。

②　作品の良さや美しさを味わう能力を育てるとともに、友だちの表現の良さに気付くことができる鑑賞活動を位置づける。

６　研究の計画（授業の計画）

（１）題材　「自分色紙」　（第４学年）

（２）題材の目標および指導計画

題材	自分色紙　　（第４学年）	総時数３時間	９月
単元目標	○色々な用具を使って、絵の具のさまざまな表現効果や用具の可能性に		

	関心を持ち、表現を楽しむ。（関心・意欲・態度） ○さまざまな表現効果の美しさやおもしろさを味わい、それをもとに発想を広げる。（発想・構想） ○筆以外の用具の扱いに慣れ親しみながら工夫する。（創造的な技能） ○互いの表し方の工夫やおもしろさを味わう。（鑑賞の能力）	
授業計画	学習活動・内容	指導上の留意点
第１時	１．作品例を見て、どんな方法で表したのか考える。 ２．教師の模様づくりを見て興味・関心をもち、どの模様づくりをするか考える。 ３．使ってみたい道具で模様づくりを試す。	・　何種類かの作品を見せ、表現方法を考えさせる。 ・　ぼかし網、ビー玉転がし、ストロー吹きなどを実演してみせる。 ・　場の設定や用具について説明し、用具の交換などについて声かけをしておく。
第２時	４．自分のお気に入りの道具を選び、模様づくりをする。 ５．複数の方法を組み合わせて模様づくりをする。 ６．自分なりに工夫して新しい方法に挑戦してみる。	・　一番やってみたい方法から試させる。 ・　自分で試した方法を発展させたり友だちの方法を参考にしたりして、さらに活動を続ける。道具の交換をするときなどには、自分の試したなかで良かった点なども伝え合うよう声かけする。
第３時	７．お気に入りの作品に台紙をつけて飾る。 ８．みんなが作った作品を並べて、それぞれのよさを味わう	・　形や色からイメージしたタイトルを付けて掲示し、作品を並べてみんなで見せ合う。 ・　美しさやおもしろさなど、友だちのよい面に目を向けさせる。

７　指導の実際

【第１時…導入と試作】

本単元の導入にあたっては、まず、教師が準備した色紙を見せ、「みんなも自分だけのオリジナル色紙を作ろう！」と呼びかけた。さまざまな技法を一つずつやって見せ、紹介することで、児童の「自分もやってみたい」という意欲をもたせることができた。

○紹介した技法

・ビー玉転がし・ストロー吹き・ぼかし網・糸引き絵・スプレー・フィンガーペインティング・スタンプなど。

八つ切りを半分にした画用紙を多めに準備しておき、たくさんの技法や色に挑戦できるようにした。また、それぞれの技法ごとにテーブルをセットし、児童が好きな技法を選んで自由に活動できるように配慮した。

さまざまな技法を試す中で、想像もしなかった模様ができたり、見たこともない模様になったりしたので、児童は飽きることなく創作活動に取り組んだ。「ビー玉が勝手におもしろい模様を作ってくれた！」「糸でへんてこな模様ができた。」「絵の具が勝手にお化けみたいな形になった。」など、どの子も作品を見せ合いながら、楽しそうに興味を持って作品づくりをすることができた。「スプレーは色水を濃いくせんとダメよ。」など、失敗したことを友達にアドバイスする姿も見られた。

【様々な技法を試す子どもたち】

【ビー玉転がし】

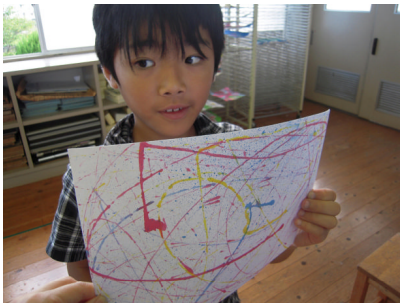
【吹き散らし】

【スプレー】

【第２時…自分色紙作り】

前時に自分で試した方法の中から気に入ったものを取り入れたり、さらに発展させたり、友だちの方法を参考にしたりしながら、自分色紙作りを行った。

「スプレーは色が薄いから、その上からビー玉転がしをしたよ。」「吹き散らしとビー玉で不思議な世界ができたよ。」「網を紙に近づけたら模様が大きいし、離したら小さくなるよ。」と、経験したことをいかし、色の交ぜ具合、水の量なども調節しながら、自分だけの色紙を作っていった。一つの方法だけで仕上げる子やいくつもの手法を組み合わせる子など様々で、一つ一つ全く違ったものになり、個性的な作品が仕上がった。



【出来上がった作品をうれしそうに手にする子どもたち】

【第３時…色紙鑑賞会】

自分の作った色紙の中から一番気に入ったものに名前を付け、台紙を貼って黒板に並べて掲示した。みんなの作品が並ぶととてもきれいで、みんなで「すごい！」「こんな色紙が売っていたらいいんに」など、自分たちの作った作品に大きな拍手がおこった。

色別グループ、技法別グループなど、グループ分けをしてみてから、一人一人が付箋に「どんなところが好きか」を書き、気に入った作品に貼っていった。どの子もそれぞれの作品の美しさやおもしろさに関心をもって、見ていくことができた。

【付箋紙に書かれたコメント】

・　雨がやんで虹が出た時みたいに、いろんな色がかがやいているみたい。
・　とってもきれい。こんな色紙があったら友達の誕生日プレゼントを包んであげたい。
・　絵の具達がぶつかって爆発したみたいで迫力がある。
・　スプレーの優しい色がにじんで、すごくきれい。夢の国みたい。

【コメントを読む児童】

自分の作品にもらったコメントを嬉しそうに読んだ後、みんなの作品を教室に掲示した。

・　初めてぼかし網とか糸引き絵とかをして、すごく楽しかったです。いろんなやり方があるんだなあと思いました。また、してみたいです。今度はもっと大きな紙をいろんな色にして自分だけの色を作りたいです。
・　ビー玉転がしをしたとき、ビー玉が自分のしたいように動いてくれなくてドキドキしたけど、「すごくおもしろい」って先生や友達に言ってもらって嬉しかったです。
・　スプレーでも網でも、いろいろある中から、自分の好きなようにしていいっていうのがすごく楽しかったです。みんながぼくの作った色紙をほめてくれて、はずかしかったけどうれしかったです。

【授業後の児童の感想】

８　成果と今後の課題

（成果）

○　「自分だけのオリジナル色紙を発明しよう」とに声かけしたため、どの子も最後の活動まで一生懸命に楽しんで取り組むことができた。
○　子どもが色々と試す中で発見したり工夫したりすることを楽しみながらの活動であったので、優劣の差がなく、どの子も楽しんで制作活動を行うことができた。
○　さまざまな技法を教えたことによって、子どもたちは絵の具遊びを楽しみながら自分なりの表現方法を習得することができた。
○　お互いの良さを見つける評価活動を取り入れたことで、自分の作品に自信を持つことができた。

（課題）

●　児童の人数に対して容器の数が少なく、スプレー待ちの児童がいたので、全員が自分の試したい技法を十分試すことができなかった。児童数に応じた数の道具を十分に準備しておく必要がある。
●　自分の表したい色にできなかった児童がいたため、スプレーや糸ひき絵など、それぞれの技法に合った絵の具の溶き方を、十分確認しておく必要があった。

参考引用文献

小学校学習指導要領解説　図画工作編　　文部科学省
学習指導要領の解説と展開　図画工作編　　安彦忠彦　監修
藤江充・三澤一実　編著　教育出版
図画工作　学習指導書　　開隆堂